

空



2017・2・3

SORA 71号

霜の花

柴田 佐知子

海割つて立ち上がりたる鯨かな

真青な海へ向きたる寒立馬

海風の磨いてゐたる寒立馬

呼ぶやうに古墳の口の開いて冬

茎漬や夜風の通る竹の音

夜神楽の顔収まらぬ女面

夜神楽の膝より神の進み出づ

渦なして蛇身高まる夜の神楽

首のなき大蛇自ら去る神楽

忘年会情死に遠き顔ばかり

湿りたる焚火跡より暮れて来し

大注連を縋ふ剛直な貌となり

馬小屋の中も地べたや冬の靄

開くたびきしむ裏木戸山眠る

胸高く歩む雄鶏霜の花

寒の水飲むに背筋を立て直す

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

注連縄の強きうねりや十二月

初日の出仏の御名の町に住み

密談のごとく焚火を囲みけり

数の子を食めり日本の音をたて

父の忌も母の忌もある古暦

たつぷりと月日ある声手毬唄

稜線に並びてみたり吊し柿

棟梁の御愛木の香を押し通す

闇汁の中に捨てたる恋もあり

人日や客間に残る煙草の香

龍の背に乗りて現れたる初芝居

猿曳の革すり切れし旅鞆

寒鯉のぐらりと揺れし濁りかな

舞ひ了へて宙を見つむる猿太夫

往生を遂げたき蒲団干しにけり

生きてゆく冬灯を眺め歩道橋

長崎 荒井千佐代

千葉 服部早苗

命がけで生くる仮の世つたもみぢ

子規庵に平らな時間草は実に

冬の葬遺影へ絵硝子色の日矢

鷹渡る波に砂文字かき消され

淋しければ猫も舐め合ふ石路日和

忘れ得ず母逝きし日の小春空

石二百積んでルルドや冬たんぽぽ

ゆりの木の何か失ひ冬木となる

礫像は膝すこし曲げ冬日和

声よりも白息太し香具師の朝

身の裡に断崖のあり雪しんしん

未だ枯れをうべなへずをりいぼむしり

読み初めのルカ伝猫のすり寄り来

偶然は必然の罨冬薔薇

初漁待つ肩にくひ込む負ふひ紐

編棒を井桁に毛糸編みにけり

福岡 柴田志津子

早々と支柱立てある菊畑

聞こえぬといふは言ひ訳枇杷の花

火山灰降り積む島の大根引く

うたた寝の夢は青春据炬燵

鶏小屋の傍に掛けたる狐罨

人目などかまつてをれぬちやんちやんこ

少年に明日の夢あり虎落笛

亡き夫のみがきし柱冬深し

福岡 岸 洋子

風呂吹やしつかり生きてやや疲れ

箸すべる里芋百歳覗きたし

雪降りり背中合はせの駅の椅子

消化器はいつも定位置山眠る

別々に働く目と耳年用意

北窓を塞ぎ誰にも縛られず

追伸に雪囲ひもう終りしと

凍滝や心ゆるめば老いたちまち

北九州 深川 淑枝

兵庫 戸栗 末廣

忘年や運河の匂ふ街に立ち

太陽は海から生れ貝割菜

運河寒し魚のこぼせる魚の影

海峡の波高き日や愛の羽根

足許に白し冬日と舳石

いつ見ても濡れてゐる色実南天

舟霊の吹きつさらしや寒土用

赤んぼの握りしめたる龍の玉

火恋し揚舟棹を失ひて

降る羽音飛び立つ羽音冬菜畑

運河凍て夕星ひとつ強く出る

水音の昏くなりたる返り花

舟霊の夜は出て遊ぶ芒原

結界は音を遠ざけ冬紅葉

野火止めの桶ひとつ置き山眠る

一つづつ石段上り年惜しむ

糸田 宮井 知英

野良猫の濡れて行くなり石路の花
帰り花気儘と言ふは頼りなし
初時雨よく似て神と鬼の面
着ぶくれて生くる力を温存す
神楽面つけて神世に舞ひにけり

粕屋 吉田 律

綿虫に重心のあり礎石群
ご神木雪の縁取つけ給ふ
墓石のどれも等しき雪の丈
神楽宿鬼あつさりと退場す
着ぶくれて殉教者めく人の列

兵庫 青木 朋子

冬籠とて編み物や煮炊き物
ラジオより昔の歌や毛糸編む
写経するやうにマフラー編み進む
編み直すモヘアの毛糸絡む絡む
晩酌のあとのうたた寝冬籠

東京 山田 正子

落葉掃く寝起きが悪いとなりの子
火の恋し流人の島の能楽堂
暮なづむ鍋釜吊す年の市
着ぶくれてすぐに捕まる鬼ごっこ
じやんけんで海側の席冬かもめ

糸島 小林 朱 夏

誰にでも懐く番犬花八手

鳥籠の水替へてゐる小春かな

悪妻は良き夫育て冬籠

母よりも老けて見らるる着ぶくれて

波音に消されてしまふ除夜の鐘

大阪 田岡 千章

猫溜り木の実溜りや宮の裏

木守柿やうやう嫁に行くさうな

処方薬またひとつ増え冬に入る

雪螢ひよいと妬心のゆるみたる

会ふにハグ別れに握手駅小春

粕屋 秋 千 晴

まづ頭立てて鮪を捌きけり

大屋根に雀の遊ぶ小春かな

伊勢海老を買ひし袋の動きゐる

大鋸屑を散らし伊勢海老跳び出せり

総立ちのジャズコンサート冬の星

千葉 原 友 子

山並の平らを遠く畳替

帰り来し案山子に苔の不精髭

淋しさに蒲団の羽毛片寄れり

松明に盛衰のあり除夜詣

紅筆は他の色知らず寒に入る

福岡 角野良生

篠栗 五句

別格本山貫く水の澄みて迅し

秋瀑の一山仏また仏

喜捨はみな一円玉や草の絮

泣く笑ふわらべ地藏や草の花

青不動据ゑて一山もみぢせり

岡垣 田中とし江

ひもろぎの献花台にも木の実降る

猪鬣を掛けて麓の鎮もれる

貌ふつて青虫を喰む枯蝻螂

銜へたる小鮒一閃かいつぶり

一人掃き二人仰げる紅葉かな

北九州 横田敬子

これよりは神の領域银杏散る

木の実降るこの世に出でし神獸鏡

父と来し頃の渡船場蛭子市

流れ藻に魚が顔出す小春かな

お供への塩の固まる冬はじめ

長崎 松尾龍之介

落葉しぐれ関西弁に降りかかる

鴟来るころび証文ある寺に

冬空に黒き歯を剥く杉襖

うぶすなの港見下ろす懐手

金網を目詰まりにして寒雀

須 惠 苑 実 耶

大野城 森 田 明 成

雑然と積まれ誓文払ひかな
花八つ手家業継ぐため職を辞す
遅れ来てすぐ馴染みたる忘年会
呼び捨ての体育会系餅をつく
注連飾る去年と同じ高さかな

噓一つおろそかにせず暮しをり
秒針の身を刻みゆく寒さかな
ともすれば易きにながれちやんちやんこ
北国やマスクの上の大きな目
塾の子を拾ひゆくバス冬の月

福岡 田 代 貞 香

東京 今井康子

(今井春生改め)

恋文はたて書きが佳し林檎むく
冬薔薇添ひとげし日の遠くなり
礎上る空の霊場冬茜
早朝の畑より冬菜持ちくれし
手袋の拍手をもらふ大道芸

雪積むはまづ草の上友逝きし
街灯のあたりの雪の激しさよ
日の射して雪に七色ありにけり
傘借りて出でし暖簾や冬時雨
大方の詩人嘘つき冴ゆる月

北九州 河原敬子

体形は土偶そつくり豊の秋
山霧の降りて来たりし座禅堂
方位盤に柞紅葉の落つる音
持ち帰れ宮の縁起と花梨の実
冬うらら遺跡の溝にもぐら穴

福岡 山内碧

揺れてゐる鴨ごと水の昏れゆきぬ
剪るを躊躇ふ一輪の冬薔薇
千歳飴提げて大人に囲まるる
乳母車降りて児が押す小春かな
掛け声を待みて動く年用意

福岡 曾根富久恵

濡れ縁によく日の当たる返り花
ふるさとの山を一望蒲団干す
アスファルト冷ゆ信号は赤ばかり
納骨や頭を垂るる着ぶくれて
抜け道を歓楽街へ厚着人

太宰府 西住三恵子

九州場所明けし日ざしの澄みにけり
日短かぎゆうぎゆう詰め市の内バス
禅僧の風呂たく枯木横抱きに
冬ぬくし妬心のありし日も遠く
描く度にはとりの鳴く賀状かな

神奈川 窪 み ち 子

もう聞けぬ隣室よりの大きくさめ

咳込みて告げず仕舞になりしかな

薔薇の香てふ線香くゆらす冬至かな

どの部屋にも老眼鏡置き冬深む

風花や長寿の眉が華やげり

兵庫 岩 井 京 子

籠る吾に事始めの餅下されぬ

数へ日や意識戻りてこの世なる

飾るもの無きすがしさの冬木の枝

冬の日や悪い日ばかりでないと医師

年の湯や身に起りしを諾ひつ

北海道 押 田 裕 見 子

普段着の花嫁姿冬ぬくし

歩を合はす若き夫婦の息白し

母の恋聴きし日の夜の雪あかり

受けし恩思ひ返して年送る

晴着きて生後二十日の子を抱く

直方 吉 田 悦 子

冬桜いまさら好きと言はれても

食卓に句集と帳簿冬日和

山茶花の見ゆるところを吾が座とす

雨音の寒さ募らす夜なりけり

逢ふ前のと きめきほどの冬銀河